

学校の概要（平成 15 年 4 月現在）

学校名	竹原市立忠海西小学校								
学年	1 年	2 年	3 年	4 年	5 年	6 年	特殊学級	計	教員数
学級数	1	1	1	1	1	1	0	6	10
児童数	36	26	33	29	29	27	0	180	

研究の概要

1. 研究主題

**豊かな表現力を培う教育活動の創造**  
 ~ 教科担任制・習熟度別学習の導入による個に応じた学習展開を通して ~

2. 研究内容与方法

(1) 実施学年・教科

**教科担任制**

- 4・5・6年の国語  
 児童の発表が固定化する傾向が見られる学年であること、論理的に話すことを指導することが必要になってくる学年であることから、専門性を生かし二人体制の充実した指導により成果が期待できると考えたため。

**習熟度別学習**

- 3・4・5・6年生の算数  
 児童の理解の状況に差が出やすい教科であり、学習の内容が難しくなる学年であるため、一人一人の実態を把握し、個に応じた指導が必要であると考えたため。

(2) 年次ごとの計画

平成 15 年度

テーマ

**豊かな表現力を培う教育活動の創造**  
 ~ 教科担任制・習熟度別学習の導入による個に応じた学習展開を通して ~

論理的に考  
える力

論理的な  
確かな表現力

「論理的な確かな表現力」を身につけようとするならば、その基盤として「論理的に考える力」を培わなければならない。また、「論理的に考える力」をつけようとするならば、目に見えるものとして「論理的な確かな表現力」を育てなければならない。この二者は互いにつながりを持ち、相乗効果が得られるものとする。

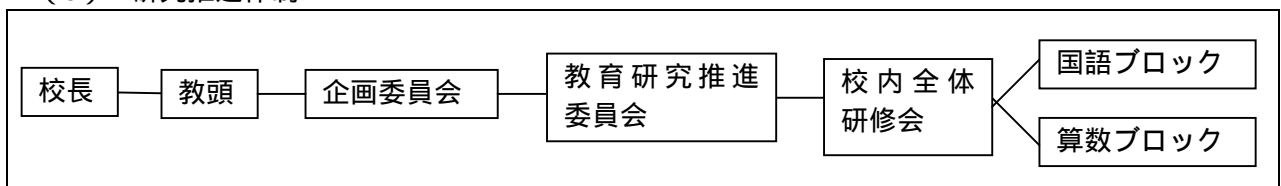
**仮説**

個に応じた指導方法の工夫と教材開発を行えば論理的に話す力を育てることができるであろう。  
 個に応じた授業展開の工夫を行えば、人前で自分の意見を言うことができ、話す力を育てることができるであろう。

	<p>研究の内容・方法 (検証の視点)</p> <p>国語</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・書く活動における習熟度別学習</li> <li>・少人数による交流の場の設定</li> <li>・「話す・聞く」「書くこと」の単元のヒントカードの作成</li> <li>・課題にかかわらせた自己評価活動（ふりかえり）</li> </ul> <p>算数</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「算数的活動」を取入れた習熟度別学習</li> <li>・表現力，思考力をつけるための指導展開の工夫</li> <li>・個に応じた教材，教具の工夫</li> <li>・課題にかかわらせた自己選択，自己評価活動（ふりかえり）</li> </ul> <p>(教科担任制・習熟度別学習)</p> <p>基礎・基本の確実な定着を図り，個性を生かす教育を実現するために，児童一人一人の特性を十分理解し，それに応じた指導方法や指導体制の工夫改善を図る必要がある。児童が達成感を味わいながら意欲的に学習に取り組み，基礎・基本を確実に身につけることが大切である。そのため，本年度は，教師の得意分野を生かした教科担任制(国語)と，個に応じたきめ細かな指導を行う習熟度別学習（算数）を導入することとした。</p>
--	---

平成 16 年度	<p>テーマ</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;"> <p><b>確かな表現力を培う教育活動の創造</b>  <b>～教科担任制・習熟度別学習による論理的思考力の育成を通して～</b></p> </div> <p>仮説</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>個に応じた指導方法の工夫と教材開発を行えば，論理的思考力を育てることができるであろう。</p> <p>個に応じた授業展開の工夫を行えば，確かな表現力を育てることができるであろう。</p> </div> <p>研究の内容・方法</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 15年度の研究を引き続き進めるが，テーマ「豊かな表現力」を「確かな表現力」と変えたのは，本校の目標である「論理的な表現力」をより明確にテーマに表すためである。</li> <li>・ 習熟度別学習を行う中で，補充的な学習や発展的な学習を取り入れ，個に応じた指導の一層の充実を図る。</li> <li>・ 教科担任と学級担任の二人体制の一層の充実を図り，興味関心を喚起するような多様な授業展開の工夫をする。</li> </ul>
----------------	---

(3) 研究推進体制



平成 15 年度の成果及び今後の課題

1. 研究の成果

(1) 実践例での成果

実践例

本の紹介をしよう(4年生 29名)[平成 15年 7月 10日]

[単元について]

本単元は「本の紹介新聞を作ろう」ということで、新聞を作ることによって本の紹介をする内容である。しかし、4年生は、授業中の発表がなかなかできない児童が数名いるので、この単元を発展させて、作った新聞をもとに本の紹介をみんなの前で発表する、発表会を設定することにした。その発表会を、少人数(習熟度別)で行い、個に応じた交流の場となるようにした。

[グループ分け(習熟度別)]

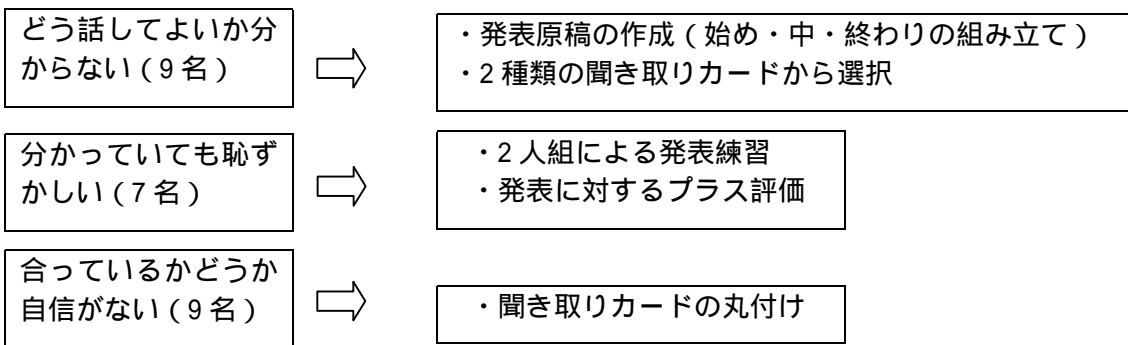
アンケートにより2つのグループに分ける。

Aグループ 発表が苦手(10名) = T1

Bグループ 発表が苦手ではない(19名) = T2

[個に応じた指導方法の工夫]

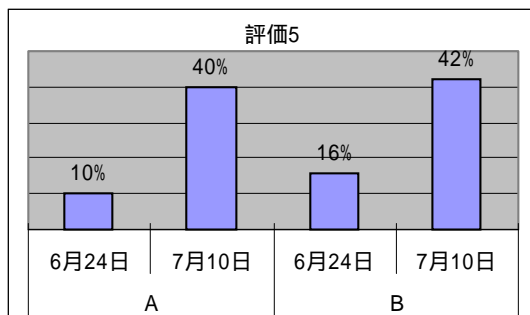
アンケートから発表できない理由をつかみ、それに応じた指導を工夫した。



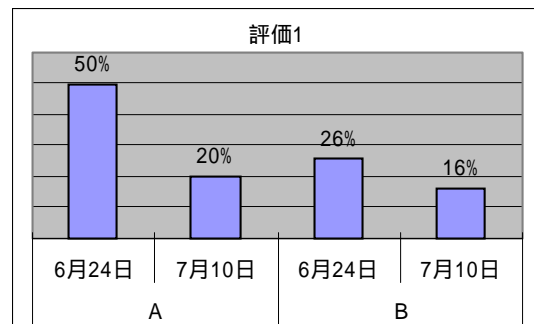
[成果]

「積極的な発表」に関して、児童の満足度がアップした。

【6月24日と本時の7月10日との振り返りカード「すすんで発表しましたか」の比較】



「よくできた」とする評価5をつけた児童  
Aグループ 10% 40%  
Bグループ 16% 42%  
ともに増えている。



「できなかった」とする評価1をつけた児童  
Aグループ 50% 20%  
Bグループ 26% 16%  
特に発表が苦手なAグループでの評価1の割合が減っている。

このように、発表が苦手と考えていた児童もそうでない児童も、「すすんで発表しましたか」の評価が改善している。このことは、少人数の交流の場を設定し、原因を分析し指導方法を工夫した成果と考える。

## 実践例

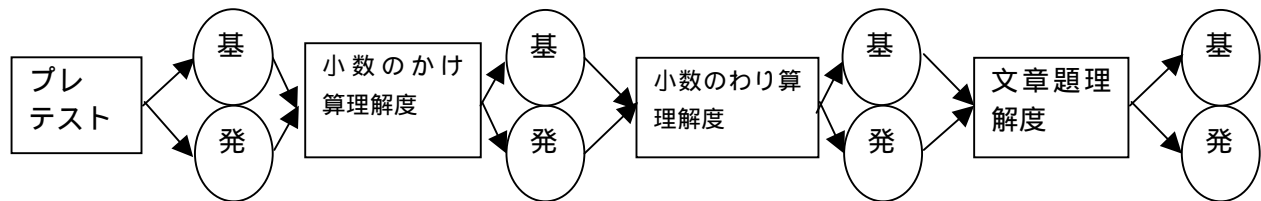
小数のかけ算とわり算(2) (5年生 29名)[平成15年10月]

### [単元について]

1学期の「小数のかけ算とわり算(1)」において、小数の概念について理解が不十分であり、筆算の仕方も間違いが多かった。また、文章題でも、適切に演算決定することができない実態が見られた。児童に対して文章問題を解くにあたって何が難しいか聞いたところ、「何算ですればいいかわからない」と答えた児童が12人おり、立式するときの演算決定が1番難しいと感じていることが分かった。そこで、2学期のこの単元は、1学期の「小数のかけ算とわり算(1)」よりも単元全体に児童一人一人の実態に応じた、習熟度別学習を多く取り入れた。

### [グループ分け(習熟度別)]

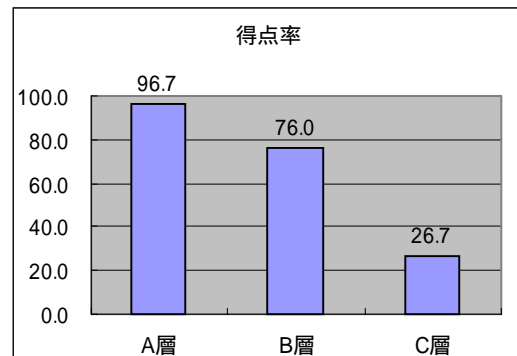
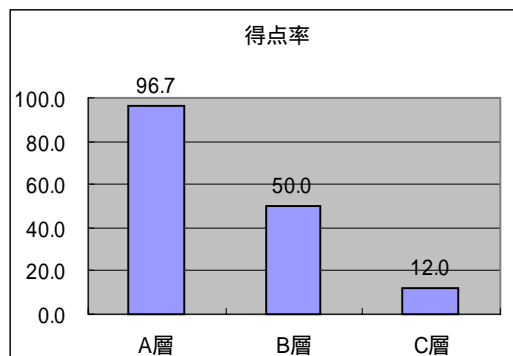
プレテストや学習し始めてのミニテストの結果と、自己選択、そして指導者の評価を加え、グループ分けをした。図のように何度も編成見直しをし、子どもの意欲を高め、より個の実態に応じた指導となるよう工夫した。



### [成果]

「考え方」での得点率が上昇した。

#### 【テストの「考え方」での得点率の比較】



#### [小数のかけ算とわり算(1)・考え方]

「小数のかけ算とわり算(1)」の単元末テストの「考え方」の得点率により、3つのグループに分けた。

= A(10人)・B(14人)・C層(5人)

そのそれぞれの平均点を出した。

B・C層の平均点が低く、より個に応じた指導の必要があると考えられる。

#### [小数のかけ算とわり算(2)・考え方]

A・B・C層の児童が、「小数のかけ算とわり算(2)」の単元末テストの「考え方」では、何点とっているか調べ、その平均点を出した。

B層 50.0点 76.0点

C層 12.0点 26.7点

B層・C層の平均点が上昇した。

本校の課題は前述したように「思考力」にあるので、テストの「考え方」での得点率を比較してみた。

グラフから分かるように、B層・C層の児童、ともに平均点が上昇している。より難しくなった単元での得点率の上昇が見られたことは、習熟度別学習を取り入れた、個に応じた指導の成果と考える。しかし、C層の得点率が低いので、今後よりいっそうの個に応じた指導が必要である。

## 実践例

かけ算の筆算(1) (3年生 32名)[平成15年12月]

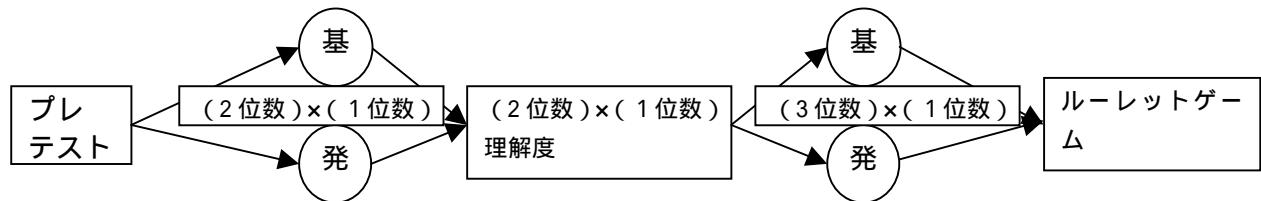
### [単元について]

本単元は、乗法についての理解を深め、その計算が確実にできるようになることをねらいとしている。「かけ算の筆算」は、基本的な計算の一つで、その意味理解と合わせて、児童一人一人に確実に定着させたい内容である。そこで、習熟度別学習を取り入れることとした。

また、(2位数)×(1位数)を学習した後、(3位数)×(1位数)の筆算を扱うが、その計算の仕方は既習の学習事項を生かして児童自身の力で見出すことが可能であり、自ら考え出す力の育成に適した教材である。一人一人にこの考える力を育てるためにも、習熟度別学習を取り入れる事は有効と考える。

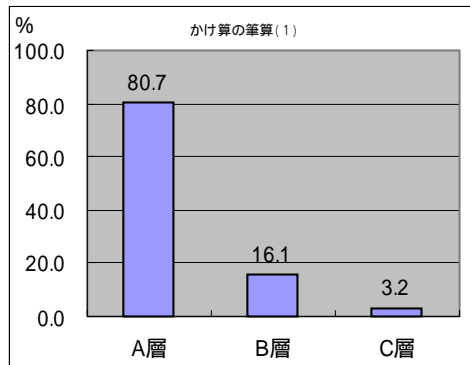
### [グループ分け(習熟度別)]

プレテストの結果から「基礎コース」と「発展コース」に分かれ、(2位数)×(1位数)の理解度からもう一度編成し直して(3位数)×(1位数)の学習を行った。



### [成果]

かけ算の筆算を理解させることができた。



かけ算の筆算(1)の単元末テストの得点率により、  
90点以上...A  
60~89点...B  
59点以下...C

と3つの層に分け、その人数の割合を調べた。

A層、B層合わせて96%にもなるということは、児童一人一人にかけ算の筆算を理解させるということがほぼ達成できたと考えられる。習熟度別学習を取り入れたことによる効果であると考えられる。

一人一人に考える力が育ってきている。



お金を図で表し、説明している。



「まず」「次に」と文章で説明している。

計算の方法を自分なりにホワイトボードに表現できていた。習熟度別学習を取り入れたきめ細かい指導により、一人一人に考える力が育ってきているといえるであろう。

## (2) 研究全体での成果

### ヒントカード・ワークシートの効果

#### 論理的思考

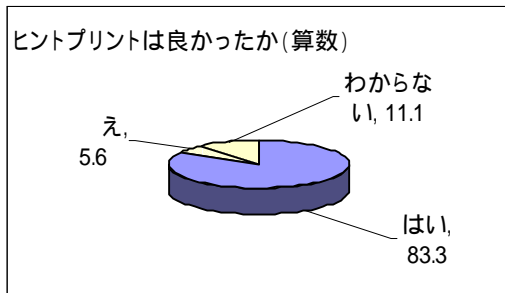
理由を書く欄を作ったり、立式の説明部分を段階的に示したカードを作ったりと工夫することにより、論理的な思考を促すことができたと考える。

#### 積極的な発表

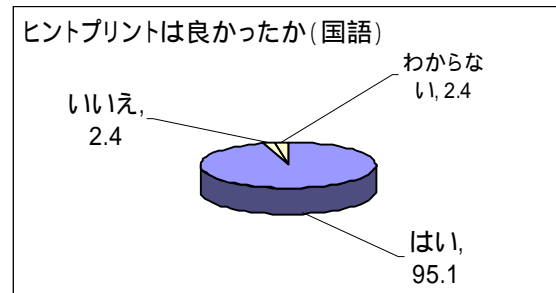
ヒントカードを使用することで、自信を持って活動したり発表したりする児童の姿が見られた。

#### 満足感

児童がいくつかのヒントカードから自己選択し、やりきることで「できた」という満足感が得られたと考える。アンケートには「自分のペースでできる」「わかりやすい」と書かれていた。



【3・4・5・6年 108名】  
〔調査日 平成15年11月27日〕



【4・5・6年 82名】  
〔調査日 平成15年11月27日〕

### 習熟度別学習・少人数学習の効果

#### 論理的思考

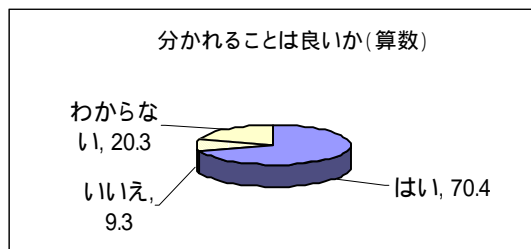
一人一人がどういう考えを持っているのか児童の実態をつかみ、指導者がきめ細かな指導を積み重ねることにより児童の思考力が伸びたと考える。

#### 積極的な発表

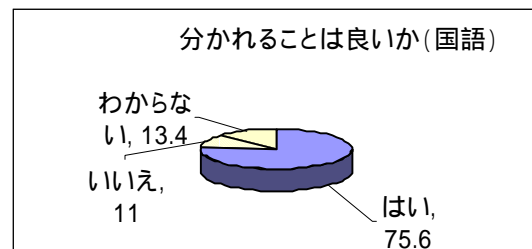
少人数の中、意欲的に発表する姿を多く見ることができた。自分に合った進度で学習を進めていけることから、自分の考えに自信がついたこと、「これぐらいの人数の前なら発表できそう」という安心感の表れであると考えられる。

#### 自力解決による満足感

少人数の学習だと、自分のペースで学習でき、指導者の支援がしやすいということから、「自分でやり遂げた」という満足感を「振り返りカード」で見ることが多かった。アンケートで「分かれることがよい」と答えた児童はその理由を「わかりやすい」「質問しやすい」と書いていた。



【3・4・5・6年 108名】  
〔調査日 平成15年11月27日〕

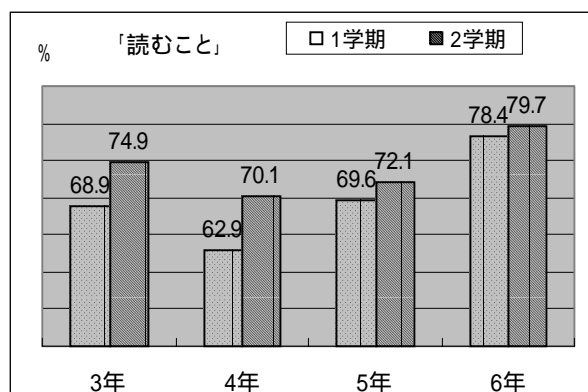
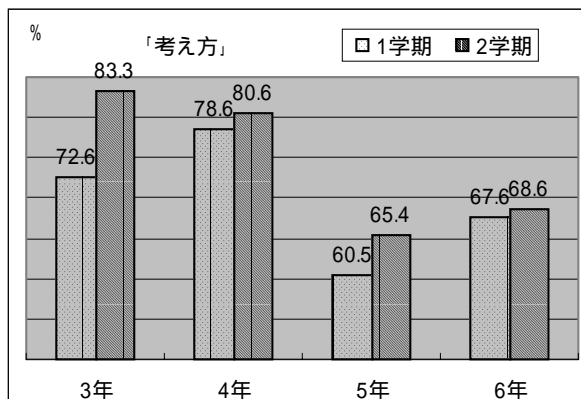


【4・5・6年 82名】  
〔調査日 平成15年11月27日〕

## 本校の課題について

### 「考え方」「読むこと」の力が伸びた

2学期のテスト（1学期のCRTに準ずる問題）の結果、「考え方」「読むこと」の点数が上昇した。このことにより、児童の思考力を伸ばすことができたと考える。

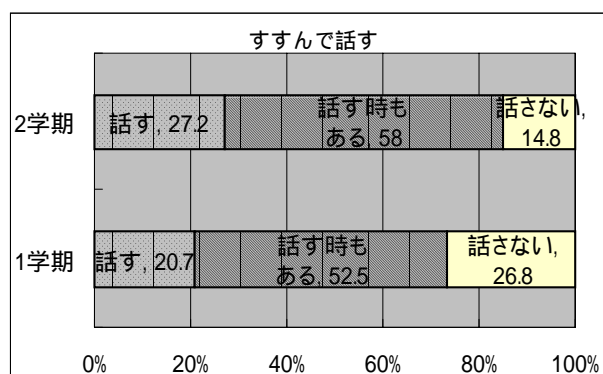
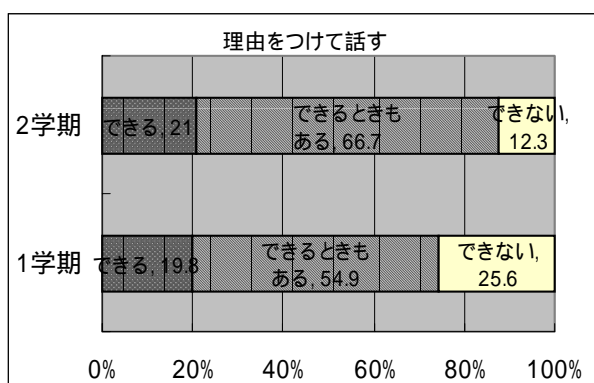


【 3～6年生 108名】（調査年月日 平成15年11月25・26・27日）

1学期と比較して、どの学年もポイントを上げている。平均点の、1ポイントから最大10.7ポイントの上昇が見られた。4月に1回目を行ってから、CRTの問題を答え合わせも取り立てた指導もしておらず、7ヵ月後に苦手な領域においてこれだけ得点が伸びたということは、児童の思考力が伸びたと考える。

### 理由をつけて積極的に発表できない児童が減少

アンケートの結果、「理由をつけて話せない」「すすんで発表しない」の割合が減少したことが分かる。このことにより、「発表しない子の固定化」という本校の課題に対して、解決が図られていると考える。



「できる」「話す」が少しであるが増え、「できない」「話さない」と答えた児童の数が約半減している。

【アンケート 4～6年 82名】  
（調査年月日 平成15年11月25日）

実践例での成果、研究全体での成果から、本校の研究・実践により、課題に対して解決が図られていると考える。

### (3) その他の成果

#### 指導案について

本年度は、公開研究会を含め一人4回の研究授業を実践した。その取組みの中で、より「つけたい力が明確になるように」、あるいは本年度から導入した「T・T、習熟度別学習の様子」が明確になるように」ということで、指導案の書き方を改善していった。

### 検証の視点の具体化

学校で共通認識の上で研究を進める「検証の視点」を，単元の中でどう具体化するのか明確にするため，項目を立てて明記することにした。

### 指導要領に基づいた単元観

学習指導要領に示された内容が，共通に指導すべき基礎的・基本的な学習内容ととらえる。その確実な定着を目指すため，指導案の単元観に指導要領とのつながりを明記することにした。

### 授業形態の明記

単元の中でT・Tの形態，習熟度別学習の授業形態がどこでどう構成するかをわかりやすくするために，指導案の「指導計画」の表に記述することにした。

### 本時のT1・T2の担当を明記

本時，T1・T2が全体指導を担当するのか，個別指導を担当するのか，指導案を見て分かるよう工夫した。

## 2 今後の課題

### 考える力が不十分

研究前より伸びが見られたとはいえ，算数科実践に見られたように，まだ考える力が不十分な児童がいる。今後も，一層個に焦点を当てた指導方法の工夫を研究していかなくてはならない。

### 発表する子の固定化

アンケートにあるように，これも改善は見られるもののまだ発表する子が固定化している傾向がある。二人体制の充実を図り，興味・関心を喚起するような多様な授業展開の工夫をしていく必要がある。

### 指導案の工夫

今後は，個に焦点をあてた授業づくりを目指し，個に対してどのような支援をするのか具体的に記入するような指導案づくりの研究をしていきたいと考えている。

### 補充・発展的な学習

中央教育審議会答申（平成15年10月7日）にあるように，「個に応じた指導」の一層の充実に向け，研究を積み重ねていく必要があると考える。『「補充的な学習」・「発展的な学習」を個に応じた指導の例示として追加することにより，子どもの実態や指導の場面に応じて効果的な指導方法を柔軟かつ多様に導入』する点についても研究していきたい。

## 学力等把握のための学校としての取組

CRT（市内共通）	・4月に前学年の国語，社会，算数，理科の基礎・基本問題で，学力定着度を調査（2～6年）。
基礎基本定着状況調査（県内共通）	・6月に5年生を対象に国語・算数の学力定着度と生活実態の調査。
研究アンケート	・学期末に，研究教科である国語と算数において，児童の満足度をアンケート。
教育アンケート（保護者）	・2月に，保護者に学校目標・研究に対する理解度を調査し，アカウントビリティを果たしているかどうかチェック。また，あいさつなど学校目標の達成度のチェックと今後の課題を分析。
（児童）	・学習・生活に関するアンケートにより，あいさつなど学校目標の達成度のチェックと今後の課題を分析。
振り返りカード	・研究教科である国語と算数において，毎時間授業終わりに，学習内容の理解や発表について記録。
プレテスト	・算数において，グループ分けの材料として，単元導入前に学習の理解度や興味・関心について調査。
各種テスト	・校内学力実態テスト，単元末テスト，小テスト，ミニテストで児童の学習の理解度をチェック。



フロンティアスクールとしての研究成果の普及

公開研究会	・平成 15 年 10 月 10 日 広く研究成果を公開。
研究主任研修会	・平成 16 年 1 月 29 日 尾道三原教育事務所管内の研究主任・フロンティアティチャー対象の研修会において、習熟度別学習を中心に研究成果を発表。
学校視察	・豊田郡安芸津町立風早小学校，三原市立田野浦小学校の視察を受け，研究について説明。田野浦小学校は，本校の校内研究授業も参観。
HP 作成	・研究の概要，授業実践報告を記載。

【新規校・継続校】

15 年度からの新規校

14 年度からの継続校

【学校規模】

6 学級以下

7 ~ 12 学級

13 ~ 18 学級

19 ~ 24 学級

25 学級以上

【指導体制】

少人数指導

T・T による指導

一部教科担任制

その他

【研究教科】

国語

社会

算数

理科

生活

音楽

図画工作

家庭

体育

その他

【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】

有

無